

■特定課題セッションⅠ 報告

「社会福祉哲学の意義・枠組・課題」

コーディネーター：秋山 智久（東京福祉大学）

特定課題セッションⅠでは、約60人が参加し、活発な発表と討論が行われた。
以下、各発表者の内容について報告する。

1）第1発表者：中村 剛氏（関西福祉大学准教授）は「福祉哲学の枠組みとプロセス - 社会福祉の経験を巡る思考の循環運動」というテーマで、社会福祉哲学の従来からの蓄積と流れの総括が行われた。氏は「福祉哲学」は単に「社会福祉哲学」の省略形に過ぎないという立場で、両者の差はないとした。福祉哲学の三つの流れを基礎に踏まえながら、現在の到達点と今後の課題を述べた。

司会者の質問に答え、現象学と福祉哲学の関係を語り、現象学が、個々の認識であるのに、如何にして「共感」などという他者とのつながりが可能であるかについては、「間主体性」という視点から可能であると述べた。

2）第2発表者：木原活信氏（同志社大学社会学部 社会福祉学科 教授）は「社会福祉哲学とスピリチュアリティ」というテーマで、社会福祉学で近年、主張されている「スピリチュアリティ」に内容と社会福祉実践における関係を発表した。その中で、特に「宗教と社会福祉の関係」に言及された。

司会者は、発表にあった日本人が無宗教であるということは「創唱宗教」（創始者がいる）の信者が少ないという意味であって、「自然宗教」心は豊かであるというコメントを述べた。

3）第3発表者：志水 幸氏（北海道医療大学看護福祉学部 臨床福祉学科 教授）からは「社会福祉専門職養成教育における社会福祉哲学の現状と課題 - 日本社会福祉教育学校連盟加盟校の教育課程分析を中心に」という発表があった。我が国の社会福祉系大学の「カリキュラム」を調査・分析して、社会福祉哲学等の科目が少ないことを実証したうえで、その必要性を主張した。

司会者は、まとめとして「社会福祉哲学の必要性」を述べた。

他の課題セッションと比べて人数も多く、活発で楽しいセッションとなった。発表者の間のつながりも良く、発表者からは成功したという感想をいただいた。

学会員の一人から、「16年間、学会に入っていたが、今日、初めて、会員で良かった」という感想が述べられた。

社会福祉研究（学会）においては、制度の解説や分析だけではなくて、こうした「社会福祉の哲学・価値・倫理」と課題とした全体的なシンポジウムがもっと必要である。